

末黒野

すぐろの

1月号 (通巻869号)



細ら波

草あればそこが浄土や昼の虫
鳥なるも飛べぬペンギン秋高し
禅寺の池寂寞と破蓮
改まる沼の秋光鷺の来て
秋うらら考似の羅漢そつぽ向き
山秋色湖日を弾く細ら波
荒々と苔生す熔岩や秋陰
長八の鰻の陰翳秋深き

松本三千夫

(名誉主宰)

櫛紅葉

船頭の低き舟唄蘆の花
溪谷の瀬音に育ち青蜜柑
秋深し雨に宿かる寺の門
飛ぶ雲に色を解きたり芒の穂
色のなき苑や盛りの花薄
どう見ても仏頂面や糸瓜垂れ
相好を崩す羅漢や小鳥来る
黄落の真つ只中の羅漢像
雨の夜の明けて火のつく鶏頭花
櫛紅葉日矢の捉ふる船溜り
合歡紅葉山雨は峽をふさぎけり
爽やかや薔薇色澄めるハーブティ

黒滝志麻子

溶岩肌

森清堯

緊張を空に放てり蒲の絮
一葉落つ夜半の雫のひかる径
月今宵テラスの椅子の位置定め
畦道につらつら連ね曼珠沙華
キヤラメルの薄紙を剥ぐ秋思かな
柿もぐや一つひとつの日のぬくみ
秋惜しむ富士は残んの月上げて
朝日射す対岸は綾谿紅葉
ラリツクのガラスの瓶の爽気かな
顕なる溶岩肌の池秋の蝶
末広の雲を染め上げ秋落暉
やはら日に生絹のごとし秋の蝶

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

牧水忌

安齋久英

束の間を尾根の隠るる霧襖
急流や四圍の照葉を織り込みて
飛沫上げ迫る沖波野分晴
稜線を霧越えゆけり牧水忌
秋水を叩く緋鯉の尾鱗かな
人の世の禍福表裏や彼岸花
潮入や葦原に風つのらせて
毒茸の色鮮やかや野の面
松虫草峰雲しばし遊ばせて
初島を指呼に湯の街秋深し

野の花

石黒興平

野仏の供華は野の花柔和顔
一村をくるむつくつく法師かな
曼珠沙華ことに旧家の門の脇
影絵めく火の見櫓や秋夕焼
谷戸道に踏むどんぐりと日の斑かな
曼珠沙華中の一本白極む
乱切りの荔枝の男料理かな
人影のやさしくなりぬ花野径
戸隠の水のうまさよ蕎麦の花
とつおいつなざる来し方虫の闇



天高し

岡野里子

秋の鷹雨の朝の海荒れて
曇天へ底紅盃を傾けて
酔芙蓉俄かの雨に酔ひ早め
優駿のたてがみ光り天高し
虫時雨普請現場の木の香り
風のなき夜半の公園虫浄土
枝折れの木の香の著し野分後
海面分くる光の道や秋落暉
電子辞書に指紋浮きたる秋思かな
新豆腐角の取れざる吾が心

次郎柿

田中臥石

波待ちのサーファー仰ぐ鱗雲
秋涛に躍るサーファー斜に滑り
呼びゐるは港灯際の牡蠣採り夫
皮を剥ぐ柿手を滑り膝の上
狂ひ咲く桜注射の痕疼く
買ひ求む波郷好みし次郎柿
真砂女詠む此の秋麗の安房の海
真砂女館出づ秋陰の海荒ぶ
部落役担ひて秋の草を刈る
松の空鶉啼く朝となりにけり

草もみぢ

森清信子

書を前にまづ眼鏡拭き夜の秋
湿原の木道通り秋の蝶
ゆるやかなる雲の流れや草もみぢ
城址とは思へぬ原や秋あかね
遠山の雲行き迅し蕎麦の花
灯台の見えゐて遠し鱗雲
影走る岬の鳶やカンナの花
一人座す苑の木椅子や秋の声
木の実落つ音ぴんと立つ犬の耳
駆くる子の後追ふ風や萩の径



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



うろこ雲

齊藤マキ子

うろこ雲をりをり軋む舳ひ船
奉納の新藁の香や一の宮
人声のうしろより来る秋の暮
月祀る母の知らざる地に住みて
紫煙濃き漢の指の秋思かな
硯海に足す名水や今日の月
台風裡卓にカレーと小さき灯と

月天心

菅野日出子

薄原亡夫とはぐれし遠き日よ
草の実や子安に残る漁師町
酔芙蓉昼は無人の両隣
秋霖や畑に積まれて古畳
月天心路上ライブを遠巻きに
浮御堂の丹の剥落や柳散る
瑕瑾なき月窓越しに一人の餉

秋燦燦

堺 昌子

公園をせましと子等や山紅葉
誰もをらぬ子規庵の庭秋燦燦
子規庵や絵となる糸瓜三個ほど
コスモスのまだ六分咲き空晴れて
まつすぐに続く道の端曼珠沙華
とんぼうの飛び交ふ庭の静寂かな
秋光やロダン作てふ地獄門

青炎集

黒滝志麻子選

鎌倉 丸山千穂子

図書館の窓にぶつかり秋あかね
竹伐るや大路の音の筒抜けに
秋気澄む天平仏の微笑みて
ひとひらの雲の行方や秋の天
秋風や外人墓地に歩をゆるめ
小式部のむらさき累ね尼の寺

宮城 門間としゑ

横浜 小野弘・正

鱗雲ままならぬ事二つ三つ
大正の木造旅館雁渡る

蔵癖の良き酒蔵や新走り

月清か十八番とび出る庭終ひ
紅葉且つ散る御成門瑞巖寺
かまきりの卵や二尺余の高き

横浜 塚越弥栄子

横浜 新倉ゆき江

露草や桁の足らざる妣のもの
日は水に届き始めて破蓮

み仏の温顔慈顔水の秋

柔らかき風に転がり露の玉

天窓の遙かを過ぎる秋の雲
僧留守の寺の奥まで野菊晴

団栗の奏つる指の隙間かな
落穂拾ふ名画のやうや背の丸み
濁声と黄色い声と赤い羽根
新米の穂を添へ届く宅配便
米どころ童話のごとく案山子立つ
松虫や湿りの風の音軽く

横 浜 神谷さうび

秋寂ぶや能楽堂の寂び深め

葦原や葉擦れの音と水の音
人絶えず軋む木道水の秋
神木の蔭ふかぶかと秋の屋
灯台の白々とあり露けしや
古利跡の見晴し台や色鳥来

横 浜 芝田幸恵

流星となりて夫来よ逢ひに来よ

鶏頭の赤にたちろぐ日なりけり
句作りの初心に還れ水の秋
朴落葉乾びゆく日も音立てて
つづれさせ風に消えしか遠くなり
子の好み夫に似てきぬとるる飯

横 浜 外山節子

誰よりも稚の欲しがる赤い羽根

強面の男の胸や赤い羽根
奉安殿ありしあたりや藤袴
一夜にて呼び名の変はる秋の月
海風の落す銀杏小粒なり

拾ひ来て銀杏飯と茶碗蒸

横 浜 竹内涼子

石段にとまどふ子犬秋麗
暴風雨金木犀のひと日かな
卓上の折鶴発ちぬ秋の風
鄙の家の長ける蘆の穂夕明り
朝市の長蛇や揃ふ大南瓜
蔬菜着く辺りに分かつ秋の屋

横 浜 高橋正江

爽やかや痰切飴の切れる音
喧騒の都会吹き消す野分かな
横浜と言へども田舎猫じやらし
生涯をこの地と定む秋日和
木犀の花散り染むる小道かな
手作りの団栗独楽や興ずる子

横 浜 鈴木一恵

月明や高層マンション鎮もりて

鱗雲約束ごとを決めかねて
無花果の口あたり良き甘さかな
段葛過ぎて海へと秋の風
秋深むマンションの灯の点々と
青空へテニスの音のさはやかに

耕 土 集

森清 堯選



小鳥来るくるみのケーキ焼くる時 横浜 友田 悠子

落し水田は金色の色を増し

澄める目の輝く秋刀魚屈きけり

秋の空悩みごと等小きき事一

また一つ挑戦してみむ敬老日

秋めける古書の匂ひの神田かな 横浜 大塚かずよ

新涼や町屋の暖簾藍深め

触れ合つてやがて繋ぐ手大花野

稚の歩のゆらりゆらりと秋桜

磯の香のとどく庵や秋澄めり

鱒雲や観光船の客の列 横須賀 久保守真佐子

律儀なり今朝突然の彼岸花

小望月手作り菓子と小夜曲と

蛸の声まで染めて日は西に

昨夜の雨萩を散らして緋毛氈

山稜へ雨来るらし初紅葉 平塚 尾崎千代一

秋の蚊や古書肆の棚を動かさる

石仏の崖の窪みや草紅葉

ペンを擱く一筆箋や後の月

小屋閉づる日の遠からず秋惜しむ

小雨降る音に寄り添ふちちろかな 横浜 吉原ひろ子

足柄に沈む夕日や秋の風

朝顔の蔓の迷へる窓辺かな

くれなゐの哀しき色や曼珠沙華

酔ひ少し幸せ少し小望月

猿の面に似たる切株秋日濃し 横浜 平野 秀子

ヴィオロンを奏つるホール壺の萩

鶏頭や鶏に追はれて逃げしこと

園児らの稲刈る手元おぼつかかな

秋霖や納骨の経消え消えと

つくつくし

小川 玉泉

(名誉顧問)

朝晴れて白を競へる酔芙蓉
となりとの垣根払ひぬ菊日和
行く秋の花火大会雷襲ふ
木犀の花ねこそぎに嵐過ぐ
秋惜しむかに鳴き交はす夕鴉
後の月雲を脱ぎては雲に入る

雑記帳 18

江の島の花火大会は、西浜を中心に十月に行われる。今年も打ち上げが始まって間もなく、雷雨に見舞われた。砂上の敷き物のほとんどは置きっ放しに。悲しい現実である。